

中学年 「ふれあいタイム」(総合的な学習) 活動案

2001年 10月17日(水) 5限目より

H13

於

3・4年教室

指導者 3・4年担任 川口 謙次

やまもも担任 松岡 秀子

介助者

岩崎 昌代

1. 単元 炭焼き窯を作って、炭を焼こう

2. 目標

- ・地域のおじいさん、おばあさんから炭焼き窯の作り方や炭の焼き方を学び、手作り窯で炭を焼く。
- ・地域のお年寄りとともに学ぶ学習活動を通して、その技や知恵のすばらしさにふれ、ふれあいを深める。
- ・自分たちの学習をインターネットで発信し、炭焼きの盛んな地域の子どもたちと友だちになる。

3. 単元設定の理由

(1) 児童について

子どもたちにとってお年よりは身近な存在である。学校から帰った時に、まず迎えてくれるのは、祖父母であり、地域のお年寄りである。子どもたちにとって、お年よりは、安心して甘えられる存在になっている。

しかし、子どもたちは、そのようなお年よりのが普段何をしているのか、地域でどんな活動をしているのか、知らないことの方が多い。さらに、おじいさんやおばあさんの知恵や技のすばらしさに気づく機会も少ない。

4月のふれあいタイムで、みんなのおじいさん、おばあさんが普段していること、自慢できること、大活躍していることを話し合った。子どもたちは、家でいろいろ聞き取ってきた。そんな中、「炭焼きをしているおじいさんがいる。」ということを知ってきた子がいた。「池の近くに窯があるよ。」「炭はどうやって作るのかな。」などの疑問が出て、子どもたちは、炭焼きについて興味を持ち始めた。

地域のおじいさん、おばあさんのことを調べるうち、炭焼きのことを勉強したいと思うようになった子どもたちと、5月21日、聞き取り学習に出かけた。子どもたちは、木を切ったり、竹を割ったりして、炭焼きの準備をしている小川炭サークルのおじいさん、おばあさんから、いろいろなことを聞きとった。その中で、「あんた、〇〇さんとのこの孫やなあ。」「あんたは、〇〇さんとのこの近くの子やなあ。」など優しく声をかけていただいた。5月24日には、炭焼き体験をさせていただいた。炭出しや木入れの作業では、「これ持てるかなあ。」「重たいで気つけやなあかんよ。」という声に励まされ、みんなが一行に並んで、炭材を順送りに運んだ。「ベルトコンベアーみたいやなあ。」「もっと、運ばせて欲しい。」という声があがり、子どもたちの炭焼き学習に対する意欲がぐんと高まった。そんな子どもたちの関心をウェビングし、整理していく中で、3つの流れができた。昔の炭焼きの様子と白川の昔の窯跡調べ、自分たちの炭焼き、調べたことを他校に発信するという内容である。

地域を歩き、調べる過程で、子どもたちは、自分の祖父母はもちろん、たくさんのお年寄りから、昔の炭焼きの様子や炭焼き窯のあった場所を教えていただいた。明星ヶ岳の窯

跡を教えていただき、案内していただいた子どもたちは、おじいさんといっしょに山道を歩き、「ねこんたんの谷」をわたり、山の中にある窯跡を発見することができた。

子どもたちの窯跡調べがしやすいようにと、雨の中、窯跡の周りの草を刈りっていたいたおばあさん。地域の人に支えられ、33個の窯跡を見つけ出すことができた。

この学習を通して、子どもたちは、お年よりの生きてきた歴史や生活の一端を知ることができ、たくさんのお年よりと出会い、その温かさを実感としてとらえることで、お年よりに寄せる思いが強くなり、心の距離が縮めることができたのではないかと考える。

炭焼き学習は、A児にとっても地域にふれる大きな経験になった。そして、何よりも地域の人のふれあいとしても貴重な時間となった。

また、炭焼き学習の経験は、A児の家庭へ地域が入り込むことにもなった。A児がもたらって帰った竹炭を早速使い始めてくれたお母さん。一度だけ小学校6年生の時に焼いたことがあるというおじいさんも、同級生が今も小川炭サークルで炭を焼いていることに興味を持ってくれた。A児のおじいさんへの聞き取り学習を通して、家庭と学級の子もたちとのつながりもさらに広がっていった。

聞き取ったこと、調べたことは、全校集会などで発表した。A児の発表は、A児と一緒に活動した経験の中から言葉を選び、みんなが発表の言葉を分担した。A児は表出言語を持たない子である。周りの子どもたちは、共に生活し、共に活動した経験から、A児の意を汲み取ろうとする。それがとても自然である。学習の中でそのような姿に支えられながら、A児自身の課題が一つ一つみえてくることが多い。

(2) 単元について

2学期は、窯作りと炭焼きに取り組んでいる。現在、小川地区のお年寄りが集まり、「小川炭サークル」という炭焼きの会を作っておられる。活動は盛んで、今までに70回近く炭焼きをしてこられた。作られた木炭や竹炭、木酢液などは、製品として販売している。また、カボチャの炭や、竹炭や木炭で作る工芸品なども手がけ、農業祭や市などに出品している。会の目的は、お互いの親睦を深め、活動を楽しむことである。世話役の浅野さんを中心として、和気藹々とした雰囲気の中、同熟練の技がいる作業も阿吽の呼吸で手際よく進められていく。

小川炭サークルの方々とともに進める炭焼き（窯作りと炭焼き）学習は、お年よりの生き生きとした姿にふれ、その知恵や技のすばらしさに気づくことができる学習である。サークルのおじいさんやおばあさん、家族の人に助けられ、みんなで協力して窯を作り上げた時の達成感は大きい。その窯で、炭を焼く体験は、子どもたちにとって忘れることのできない、貴重な体験になるだろう。

炭焼きでは、火が弱いときじり（炭にならない部分）の多い炭になる。。強すぎると灰になる。火を焚く時間は、窯の大きさや形によってそれぞれ違う。初窯での炭焼きは、これまでのデータがないため、特に難しい。火加減の調節や、風穴を小さくしたり閉じたりするタイミングが微妙である。「ミニ白川窯」での炭焼きは、子どもたちにとってはもちろん、小川炭サークルのおじいさんたちにとっても、初めての経験であり、炭焼きの手順やコツを教えていただきながら、ともに初窯での炭焼きを学びたいと考える。

(3) 学習の経過と支援

9月に入り、いよいよ炭焼き窯を作る時期に入った。最初は簡単に考えていた子どもたちも、窯作りの大変さが分かってくると、本当に自分たちにはできるのか不安になっていった。窯作りは、石を積み、土をこね、壁を固め、天井を固め、大変な苦勞と努力がいる。たくさん石や土が必要になる。子どもたちだけでなく、教師の不安も大きかった。何度

も話し合い、「みんなで本格窯をつくる。」「自分たちでできることは最後までがんばる。」「自分たちだけでできない作業や材料集めは、いろんな人に助けてもらえるようお願いする。」という方針を決め、本格窯作りに取りかかった。

子どもたちは、休み時間も返上で土掘りに精を出した。石集めでは、家の人に聞いたり、自分で歩いたりして、石のありかを探した。家の人、小川炭サークルの方々にご協力いただき、たくさんの石が集まった。

土掘りも石集めも力仕事である。子どもの力では、手に負えないことも多い。それでも、作業を繰り返すうちに、スコップの使い方がうまくなり、石の運び方もうまくなった。小川炭サークルのおじいさんたちには、窯の場所の選定から窯の完成まで、作業の要所要所で関わっていただき、教えていただいた。

窯の看板を作る活動では、みんなの思いが言葉になって表れた。共通する思いを一つの言葉に託し、いい炭を焼きたいという願いを込めて『みんなの力と希望が詰まったミニ白川窯 34号 いっぱいつくるぞ』と決まった。全員が見守る中、交代で言葉を丁寧に書いていった。窯が成功したら、その日付と全員の署名を入れることにもなった。

窯の穴掘りが終わり、床もできた。ようやく窯の形が見えてきた。窯ができてくるにつれて、子どもたちの思いもふくらんできた。窯作りの作業はこれからが本番である。壁土づくりや天井作り、炭材の切り出し作業などの力仕事である。いい窯を作りたい、いい炭を焼きたいという思いを実現させるために、子どもたちとどこまでがんばれるか、子どもたちとともに窯作りを楽しみたいと思っている。

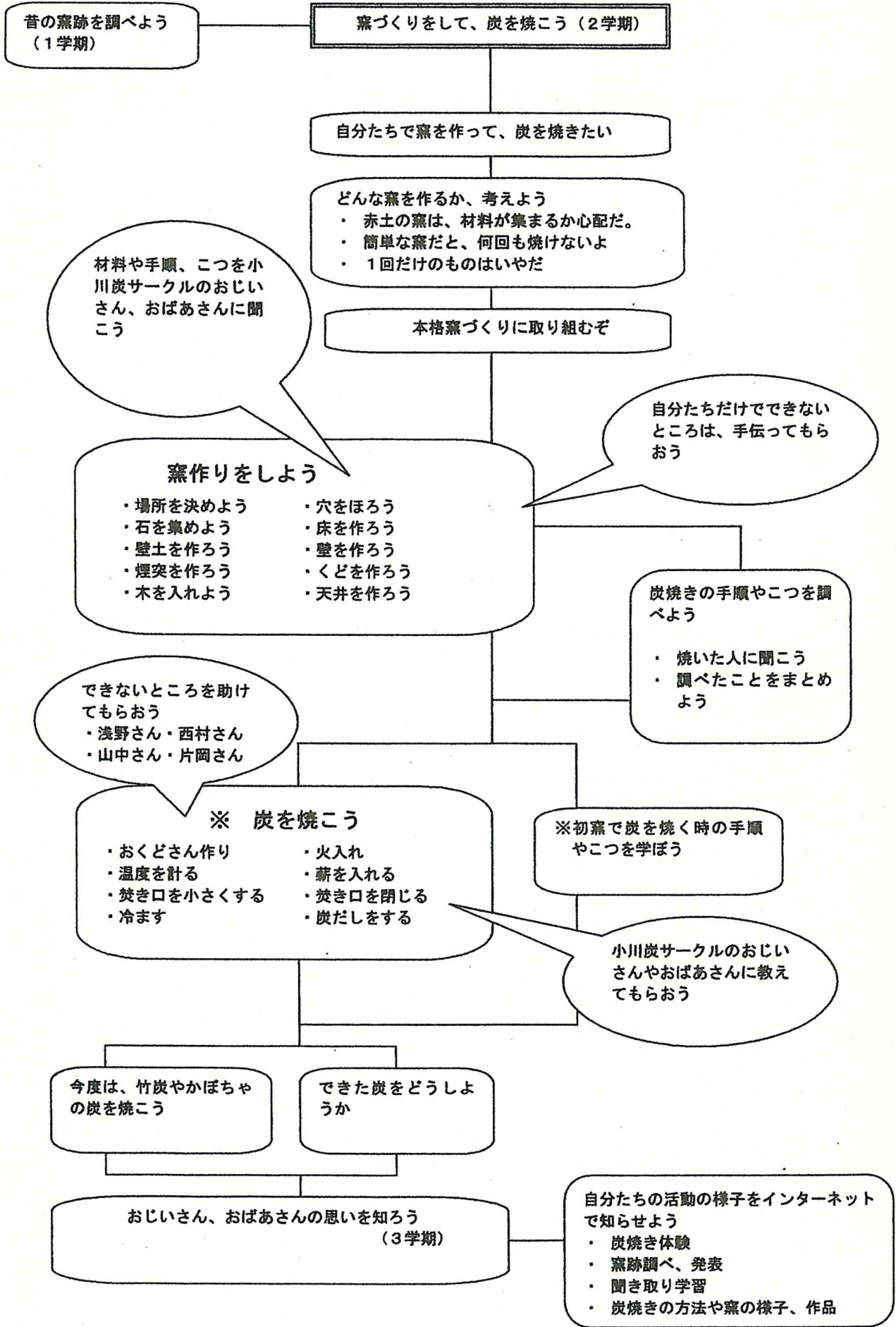
A児も、集めた石の山ができ、切り出した木をそろえ、窯をつく、そんな一連の作業を通してみんなと一緒に作り上げていくことを感じ取るだろう。来てくれたおじいさんのもとへみんなと一緒に駆け寄っていきながら、だんだんとおじいさんに慣れていく。おじいさんたちも、子どもたちとAちゃんとの関わりに自然にふれることで、A児の存在をより身近に感じてきてくれているように思う。さらに、何度か繰り返していく作業の中で、A児のこだわり—例えば、泥が靴の裏や手に付くのがとても嫌いで避けずにはられない—が少しずつ取れてきている。また、日常生活の中ではなかなか経験できなかったこと—意識的に重いものを持ち上げるとか道具を使うなど—を繰り返して体が覚えていっているようである。

炭焼き窯作りでは、子どもたちの学習の歩みは炭焼き窯という目に見える形となって現れる。子どもたちは、自分たちの学習の成果を自分の目で見て確かめ、次の活動への意欲を高めることと考える。

作業や実習で分かったことや感じたことは、丁寧に綴らせ、それを交流することで、お互いの思いや願いのよさに気づかせたいと考える。そのために、「かまづくり 日記」を書き、それをファイルに綴じていく。思いを交流し、つなげることが、活動を支える力になると考える。

本時は、いい炭を焼くために、おじいさんたちと相談し、初窯での炭焼きの方法をともに学ぶ学習である。子どもたちは、事前に、おじいさんたちに手紙を出し、分からないところや不安なところがあるので、学校に来て教えてくださいとお願いしている。子どもたちの思いに応じて来ていただいた小川炭サークルのおじいさんたちに、自分たちが考えた炭焼きの手順やコツを聞いてもらい、確かめ、分からないところ、不安なところを相談し、みんなで話し合い、次時の炭焼き活動に望めるようにしたいと考える。

4. 単元構成



さあ、炭焼きをはじめよう

5

5. 点火の準備をしよう。

- ・ぼくは、土をこねよう。
- ・わたしは、石を運ぼう。
- ・薪の用意をしよう。

6. さあ、炭焼きのはじまりだ。

- ・点火しよう。
- ・記念の看板に日付と自分の名前を書いて、みんなで立てよう。
- ・いい炭を作りたいな

- ・重い石を運んだり、木を切ったりする作業では、けがをしないように注意させる。

☆小川炭サークルのおじいさんたちにも手伝っていただく。

- ・みんなで点火式をして、はじめての炭焼きを祝い、いい炭を焼くぞという意欲を高めたい。
- ・みんなで作った「ミニ白川窯の看板」を立てさせる。

◎いい炭を焼きたいという願いを持って楽しく、生き生き活動しているか。

中学年 「ふれあいタイム」(総合的な学習) 活動案

2001年 10月17日(水) 5限目より

於 3・4年教室

指導者 3・4年担任 川口 謙次

やまもも担任 松岡 秀子

介助者 岩崎 昌代

1. 単元 炭焼き窯を作って、炭を焼こう

2. 目標

- ・ 地域のおじいさん、おばあさんから炭焼き窯の作り方や炭の焼き方を学び、手作り窯で炭を焼く。
- ・ 地域のお年寄りとともに学ぶ学習活動を通して、その技や知恵のすばらしさにふれ、ふれあいを深める。
- ・ 自分たちの学習をインターネットで発信し、炭焼きの盛んな地域の子どもたちと友だちになる。

3. 単元設定の理由

(1) 児童について

子どもたちにとってお年よりは身近な存在である。学校から帰った時に、まず迎えてくれるのは、祖父母であり、地域のお年寄りである。子どもたちにとって、お年よりは、安心して甘えられる存在になっている。

しかし、子どもたちは、そのようなお年よりのが普段何をしているのか、地域でどんな活動をしているのか、知らないことの方が多い。さらに、おじいさんやおばあさんの知恵や技のすばらしさに気づく機会も少ない。

4月のふれあいタイムで、みんなのおじいさん、おばあさんが普段していること、自慢できること、大活躍していることを話し合った。子どもたちは、家でいろいろ聞き取ってきた。そんな中、「炭焼きをしているおじいさんがいる。」ということを知ってきた子がいた。「池の近くに窯があるよ。」「炭はどうやって作るのかな。」などの疑問が出て、子どもたちは、炭焼きについて興味を持ち始めた。

地域のおじいさん、おばあさんのことを調べるうち、炭焼きのことを勉強したいと思うようになった子どもたちと、5月21日、聞き取り学習に出かけた。子どもたちは、木を切ったり、竹を割ったりして、炭焼きの準備をしている小川炭サークルのおじいさん、おばあさんから、いろいろなことを聞きとった。その中で、「あんた、〇〇さんのとこの孫やなあ。」「あんたは、〇〇さんとこの近くの子やな。」など優しく声をかけていただいた。5月24日には、炭焼き体験をさせていただいた。炭出しや木入れの作業では、「これ持てるかなあ。」「重たいで気つけやなあかんよ。」という声に励まされ、みんなが一列に並んで、炭材を順送りに運んだ。「ベルトコンベアーみたいやなあ。」「もっと、運ばせて欲しい。」という声があがり、子どもたちの炭焼き学習に対する意欲がぐんと高まった。そんな子どもたちの関心をウェビングし、整理していく中で、3つの流れができた。昔の炭焼きの様子と白川の昔の窯跡調べ、自分たちの炭焼き、調べたことを他校に発信するという内容である。

地域を歩き、調べる過程で、子どもたちは、自分の祖父母はもちろん、たくさんのお年寄りから、昔の炭焼きの様子や炭焼き窯のあった場所を教えていただいた。明星ヶ岳の窯